

観音の銅の像鷹の形に反化して奇しき表を示す縁

第十七

大倭国平群郡 鯛村の岡本尼寺に、観音の銅の像十二体有す 昔少聖田宮に宇 御めたまひし天皇の世に上宮皇太子の住みたまふ所の宮なり。太子誓願を發して宮を以て尼寺と成したまふなり。聖武天皇の世に、彼の銅の像六体盗人に取らる。尋ね求むれども得ること無し。数の日月を経て、平群郡の馱の西の方に少き池有り、夏六月に、彼の池辺に牧牛の童男等有りて池の中を見れば、聊なる木の頭有り。頭の上に鷹居る。牧牛彼の居る鷹を見、礫と塊とを拾集め、之れを以ちて擲打てども、避らずしてなほ居る。擲拍ちて疲れ懈り、池に下りて鷹を取る。捕らむとしてすなはち水に入り、居る所の木を見れば、金の指有り。取りて牽き上げ見れば、観音の銅の像なり。観音の像に頼りて、名けて菩薩池といふ。牧牛の童男諸人に告知らす。諸人転へ聞きて寺の尼に告知らす。尼等聞き来り、見れば実に其の像なり。塗れる金纏け落つ。尼衆彼の像を衛繞みて悲ひ哭きて云さく「我れ尊き像を失ひ、日夜恋ひ奉る。今邂逅に逢ひたてまつる。我が

一 すると同時に、の意。
三「浪」は泉の俗字(名義抄)。「泉は冥界の意。国史圖書館本訓釈「浪世弥」は、「よみ」という訓を示すもの。本説話に述べられた冥界「浪(心)」は、死後審判の思想がとりいれられて、三 自分の方にもどつて来て。四 命を贖った人を助けさせる。五 自分の方にもどつて来て。六 施さなかつた人を飢渴させる。

第十七縁

あやしき表(し)の説話。今昔物語集十六ノ十三に書載。
一 上巻四縁。二 奈良泉生駒郡斑鳩町あたり。
三 法起寺。斑鳩町大字岡本に所在。
四 法起寺に伝存する銅造の菩薩立像を本説話の十二体の観音銅像のうちの一体に擬する説が『日本歴史地名大系・奈良県の地名』にみえるが、したがいがたい。法起寺の菩薩立像は像高二〇・一センチの小さく、本説話の銅像がもう少し大きめの像として記述されているような印象を与えていること(鷹がとまっていたのは像ではなく像の指とされているに齟齬する。また、法起寺の菩薩立像は像体を水面下に沈めたばあいに指が水上に突出するような形態ではないので本説話の銅像ではない。この菩薩立像のようなつくりでは、ことなつた印相の像であつても、像体が水面下であつて一本の指が水上に突出するような形態の像を想定することが困難である。
五 たんに十二体なのではなく、十二体で一組になつていたのであろう。六 観音、七 観音、三十三 観音、などは知られているが、このような十二体で一組の観音は他に例をみない。
六 推古天皇。七 聖徳太子。

諸の大師、何の罪過有せばか斯の賊の難を蒙りたまふ」とまうす。然うして輩を厳り像を安きて、寺に請へ奉る。道俗集りて言はく「錢を鑄らむとして盗み取れども、用るに便無く、思ひ煩ひて棄てたるなり」といふ。定めて知る、彼の鷹と見ゆる者は現実の鷹にあらずして観音の变化なり、と。更に疑ふことなかれ。涅槃經に説きたまふが如し「仏の滅後といへども、法身常に存る」とときたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

法花經を読む僧を咎りて現に口喎斜み悪しき死の報を

得る縁 第十八

去天平年中に、山背国相楽郡の部内に、一の白衣有り。姓名詳ならず。同じき郡の高麗寺の僧栄常、常に法花經を誦持つ。彼の白衣僧と其の寺に居て、暫間暮を作つ。僧暮を作つ条に言はく「栄常師の基手かな」といふ。遍ごとに言ふ。白衣僧を咎りて、故に己が口を戻らしめ、効ひ言ひて曰はく「栄常師の基手かな」といふ。是くの如く重々止めずなほ効ぶ。爰に奄然に白衣口喎斜む。恐りて手を以ちて頤を押へ、寺を出でて去る。去る程遠からずして身挙り

へ聖徳太子伝私記・下所引法起寺塔露盤銘文に「上宮太子聖德皇、壬午年二月二十一日、臨崩之時、於山代兄王、勅御願旨、此山本宮殿宇、即処專為作寺」とみえる。九 所在未詳。
〇「いしなげうつ」の表記を「擲打」「擲拍」と変化させている。「擲イシナゲ」(名義抄)。
二「とる」の表記を「取」「捕」「取」と変化させてゐる。三 未詳。三 鍍金。四 はがれ落ちる。五 上巻三十五縁。六 仏菩薩の尊称。類似の表現が中巻二十二縁にみえる。
七 銅像を原料として銅錢を鑄ようとする。続紀・和銅四年(七二)十月二十三日条に「凡私鑄錢者斬」とあるように、実行すれば斬刑。
八 養老賊盜律によれば、仏像を盗み毀(る)るならば徒(三年)の刑、菩薩像ならば罪一等を減ずる。盗んで供養するならば杖八十の刑。
九 大般涅槃經後分・上。

第十八縁

悪業についての現報説話。今昔物語集十四ノ二十八に類話。
三 過ぎ去つた時を回顧している。「去年」の例は下巻二十七縁の会話中にみえるが、本説話のような例は本書には無い。当事者あるいは見聞者の口吻か。三 七二九・七四九年。
三 中巻六縁。内容の類似する上巻十九縁も「山背国のこととされていた。
三 京都府相楽郡(山背)郡山城町大字上泊(山背)に所在。高麗寺跡がその地。
三 未詳。本説話以外に所伝をみない。
三 上巻十九縁、下巻二十縁、など類話はいずれも法華經にかかわる。
三 僧尼は博戯は禁じられたが、碁はゆるされた(僧尼令)。三 上巻十九縁。
三 あこ。三 全身。